

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第37集

M O T O C H I B A R U

# 元 地 原 遺 跡

地方特定道路整備事業（都農綾線・元知原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 1

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第37集

M O T O C H I B A R U

# 元 地 原 遺 跡

地方特定道路整備事業（都農綾線・元知原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県埋蔵文化財センター

# 序

埋蔵文化財の保護・活用に対しまして、日頃より深いご理解をいただき厚くお礼申し上げます。

このたび宮崎県教育委員会では、地方特定道路整備事業都農綾線・元知原工区の道路整備に伴い、元地原遺跡の発掘調査を行いました。本書はその報告書です。

今回の調査では、縄文時代の集石遺構やピット群が検出され、石鏃や敲石・縄文土器片等が出土しました。先人の歩みを振り返り、郷土の歴史を解明する貴重な資料を得られたことは大きな成果と言えるでしょう。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助となることを期待します。

なお、調査にあたってご協力いただいた関係諸機関をはじめ、ご指導・ご助言をいただいた先生方、並びに地元の方々に心からの謝意を表します。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

# 例 言

1. 本書は、地方特定道路整備事業（都農綾線・元知原工区）に伴い、宮崎県教育委員会が行った元地原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宮崎県西都土木事務所の依頼を受けた宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成10年9月16日から平成10年10月23日まで行った。
4. 現地での実測等の記録は、鈴木健二、青山尚友、福田泰典、下田代清海が行い、一部を業者に委託した。
5. 本書に使用した写真は、鈴木が撮影した。
6. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。図面の作成、実測、トレースは主として鈴木が行い、一部を整理補助員の協力を得た。
7. 本書で使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図を基に作成し、調査範囲図は、西都市農村整備課の5千分の1図を基に作成した。
8. 土層断面および土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は、座標北および磁北である。レベルは海拔絶対高である。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。  
S I…集石遺構    S C…土坑    P…ピット
11. 本書の執筆・編集は鈴木が行った。
12. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センターに保管している。

# 本文目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 調査の概要	2
第1節 遺跡の位置と環境	2
第2節 調査の経過	2
第3節 基本層序	4
第Ⅲ章 調査の記録	7
第1節 縄文時代の遺構	7
第2節 縄文時代の遺物	10
第3節 まとめ	17

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図	3
第2図 元地原遺跡周辺地形図	5
第3図 基本土層柱状図	6
第4図 元地原遺跡遺構分布図	8
第5図 元地原遺跡土層断面図	9
第6図 1号集石遺構実測図	11
第7図 礫群範囲図	11
第8図 土坑実測図	12
第9図 北東側ピット群実測図	12
第10図 IV層・V層出土遺物分布図	13
第11図 元地原遺跡出土土器実測図	14
第12図 元地原遺跡出土石器実測図(1)	14
第13図 元地原遺跡出土石器実測図(2)	15

# 表目次

第1表 元地原遺跡出土土器観察表	16
第2表 元地原遺跡出土石器計測表	16

# 図版目次

図版1	1 調査区全景（南から）	19
	2 調査区全景（北から）	19
	3 南側土層断面	19
	4 北側土層断面	19
	5 南側土層断面（風倒木）	19
	6 土層断面（ピット）	19
図版2	1 礫群（南から）	20
	2 礫群（東から）	20
	3 1号集石遺構（東から）	20
	4 北東側石器出土状況（北から）	20
	5 北東側ピット群（北から）	20
	6 1号土坑（南から）	20
	7 1号土坑（東から）	20
図版3	1 1号土坑（北から）	21
	2 2号土坑（東から）	21
	3 ピット群（P1～P4・東から）	21
	4 ピット群（P1～P4・南から）	21
	5 縄文時代早期土器	21
図版4	1 石鏃・楔形石器	22
	2 石核の残核・二次加工のある剥片	22
	3 敲石	22
	4 剥片	22

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査に至る経緯

宮崎県西都土木事務所では、地方特定道路整備事業に伴って、都農綾線・元知原工区の道路整備を行うことを計画し、宮崎県教育委員会文化課に計画地内の文化財の有無について照会を行った。

平成10年6月の県文化課による現地調査の結果、小林軽石層上位の暗褐色硬質土層で縄文時代早期の集石遺構等の文化財の所在が確認された。平成10年7月、宮崎県西都土木事務所と県文化課、埋蔵文化財センターによる協議の結果、記録保存の措置をとることになった。調査区には、多量の木の根や廃土があり、除去するには莫大な労力や経費を用するため、工事発注後、業者に廃土や表土を除去してもらい、調査を実施することになった。

平成10年8月、元地原遺跡の調査依頼が宮崎県西都土木事務所から文化課へ提出され、平成10年9月16日～平成10年10月23日の期間で調査に着手した。

## 第2節 調査の組織

元地原遺跡の調査の組織は次の通りである。

調査主体 宮崎県教育委員会

発掘調査（平成10年度）

教 育 長	笹山竹義
教 育 次 長	川崎浩康
	岩切正憲
文 化 課 長	仲田俊彦
同 課 長 補 佐	矢野 剛
主幹兼庶務係長	井上文弘
埋蔵文化財係長	北郷泰道
調 整 担 当	重山郁子

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	田中 守
庶 務 係 長	児玉和昭
調 査 第 二 係 長	青山尚友
主 査（調査担当）	鈴木健二

整理報告（平成12年度）

教 育 長	笹山竹義
教 育 次 長	福永孝義
	岩切正憲
文 化 課 長	黒岩正博
同 課 長 補 佐	井上 貴
主幹兼庶務係長	長谷川勝海
埋蔵文化財係長	石川悦雄
調 整 担 当	飯田博之

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長	矢野 剛
副所長兼総務課長	菊池茂仁
総 務 係 長	亀井維子
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫
調 査 第 三 係 長	菅付和樹
調 査 第 四 係 長	永友良典
主 査（調査担当）	鈴木健二

調査協力 宮崎県西都土木事務所

## 第Ⅱ章 調査の概要

### 第1節 遺跡の位置と環境

元地原遺跡は、西都市と国富町の郡境、西都市大字三財字元地原に所在する。

県道高鍋高岡線が西都市三財の中心街、岩崎で上三財路線に分岐するが、この県道に沿って三財川にかかる囲橋をわたり、坂を上り詰めると標高90メートル、一ツ瀬川の支流三財川と本庄川の支流北俣川に挟まれた元地原台地が開ける。元地原遺跡は、この台地の北西端、西都市の中心街から南西へ約20kmの位置に立地する。

この台地一帯は薩摩原とも称され、大正年間、宮崎県知事有吉忠一により開田事業が進められた所である。

本遺跡の北東、谷を隔てた小豆野台地上には、方墳に方形の土堤を巡らせた国指定史跡・常心塚古墳が単独で所在し、また、同台地東側縁辺部には前方後円墳6基・円墳67基・横穴墓4基で構成された県指定史跡・三財古墳群が分布している。

元地原台地上には、本遺跡から南西約150mの所に元地原地下式横穴群が位置しており、昭和45年の西都市教委による調査で7号墳までが確認されている。

西都地方で縄文時代の遺跡として確認されている地点は比較的少ないが、この地域に多く見られる洪積層の台地上には縄文式土器片が散見される。それらの土器片は、ほとんど縄文時代の後期から晩期にかけてのもので、前期から中期にかけての縄文遺跡はきわめて少ない。

本遺跡の北東約11km、西都原台地上にある縄文前期の原口遺跡では、貝殻条痕文土器等の早期の土器を伴い集石遺構が検出されており、また石匙様石器等が出土している。西都市の北西端、上原台地上にある縄文後期の銀鏡上原遺跡では、磨消縄文系の土器が多量に出土しており、石包丁様の石器片等も出土している。また都於郡、荒武の藤棚では条痕文土器、押型文土器の破片が散布する。

三財川の支流田野川を挟んで元地原台地の北西にある雷野台地上に位置する雷野遺跡（標高約90m）では、古墳時代の竪穴住居跡が2軒検出され、土師器が数点出土している。

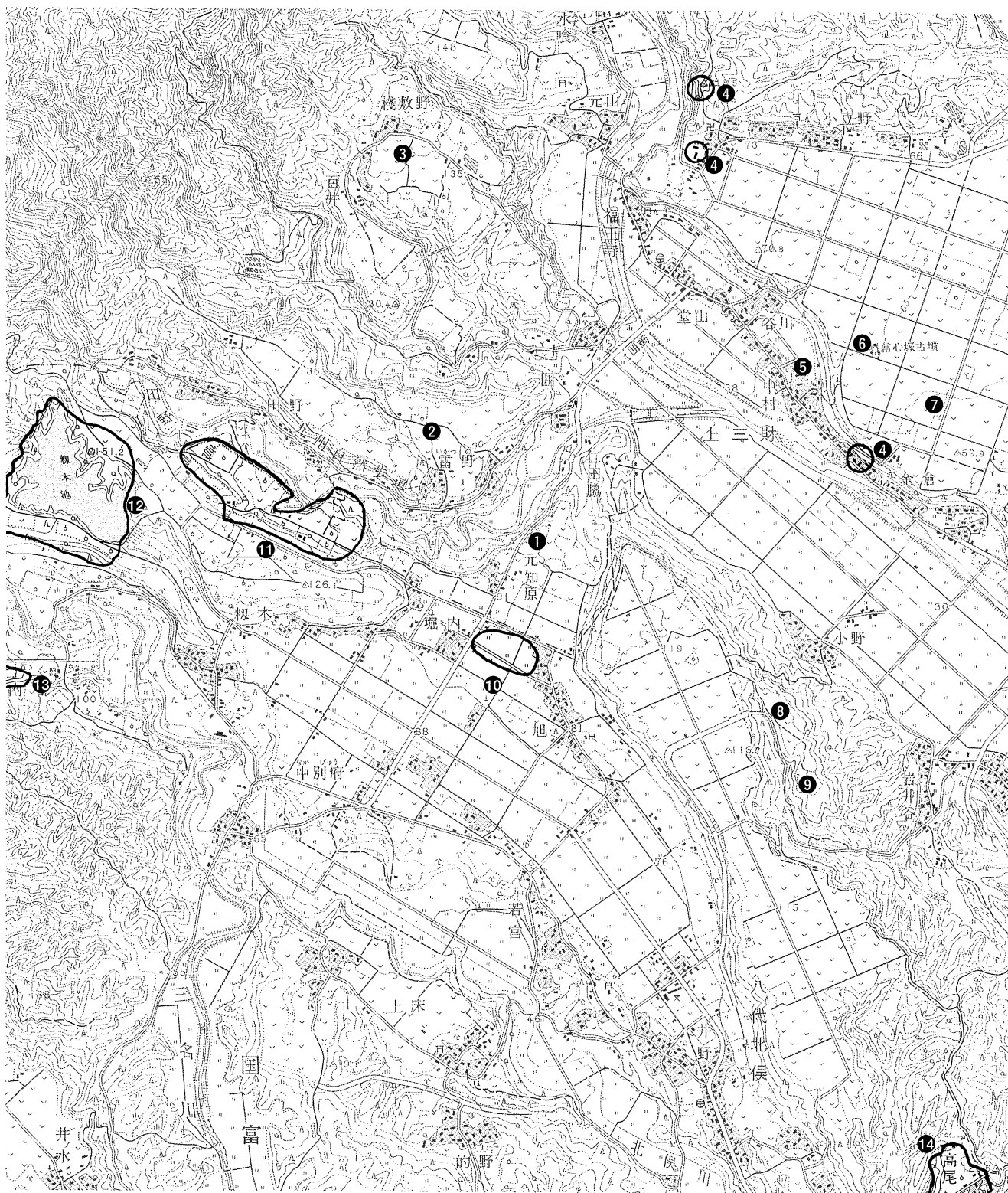
### 第2節 調査の経過

元地原遺跡の調査対象面積は280㎡である。宮崎県西都土木事務所との協議を踏まえ、道路工事業者により重機を使って表土を除去してもらった後、第Ⅱ層（黒褐色土）～第Ⅴ層（黒褐色土）を人力で掘り下げて調査を進めていった。

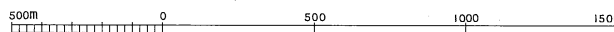
調査対象区は、台地の端部で西側は谷になっている上、調査範囲が細長く（全長46m、最広部5m、最狭部2m）、グリッド杭を設置しにくい。そこで、任意のグリッド杭をA～E点まで10m間隔で一直線に設置するとともに、任意のレベル杭を設置し、それを基にして調査を進めた。その後、国土座標の杭を設置して、その座標の中に任意のA～E点を位置づけた。

南端部西壁と北端部西壁にトレンチを掘削し土層の観察を行った結果、北東方向へやや下っていく傾





1 : 25,000



- |         |              |         |              |
|---------|--------------|---------|--------------|
| ① 元地原遺跡 | ② 雷野遺跡       | ③ 榎敷野遺跡 | ④ 三財古墳群(県指定) |
| ⑤ 中村遺跡  | ⑥ 常心塚古墳(国指定) | ⑦ 外原遺跡  | ⑧ 小野城跡       |
| ⑨ 中ヶ原遺跡 | ⑩ 元地原地下式横穴群  | ⑪ 下原遺跡  | ⑫ 柳木池遺跡      |
| ⑬ 南川内遺跡 | ⑭ 高尾遺跡       |         |              |

第1図 遺跡位置図

斜した地形であることが確認された。また、耕作による削平のためか、北側ではⅡ層～Ⅲ層がなく、耕作土の下層はすぐⅣ層の黒褐色土となっていた。

調査は、Ⅳ層上面で調査区全体を揃える作業から始めた。

南西側ではⅢ層（黒色土）下部から礫群の頭が現れ始め、Ⅳ層（黒褐色土）で縄文早期と考えられる集石遺構1基が検出された。さらに集石遺構周辺部には、広い範囲で礫群が検出された。

北東側ではⅣ層で石器の剥片等の遺物は出土したものの、遺構は検出されなかった。

Ⅴ層で任意のレベルを設定して調査区の地形図（10cmコンター）を作成した後、遺構確認のためのトレンチを4カ所入れたところ、Ⅵ層上面（小林軽石層）でピット群が確認された。

そこで調査区全体をⅥ層上面で精査し、遺構の検出を行った結果、北東部で土坑2基、調査対象面全域からピット群が検出された。また北東部西壁寄りの一部のピット群の並びからは平地式住居の可能性も考えられた。

ピット群や土坑の埋土は、Ⅳ層とほぼ同じ黒褐色土で、それと類似した黒褐色土のⅤ層上面では遺構を捉えることができなかった。

遺物の出土状況を見ると、第Ⅳ層と第Ⅴ層の黒褐色土層からわずかではあるが土器片や石器・剥片等が出土した。

出土遺物は、縄文早期と考えられる土器片や石器（石鏃、敲石等）・剥片等で、土器片は調査区の南側に集中し、石器及び剥片等は、調査区の北側に集中する傾向が見られた。

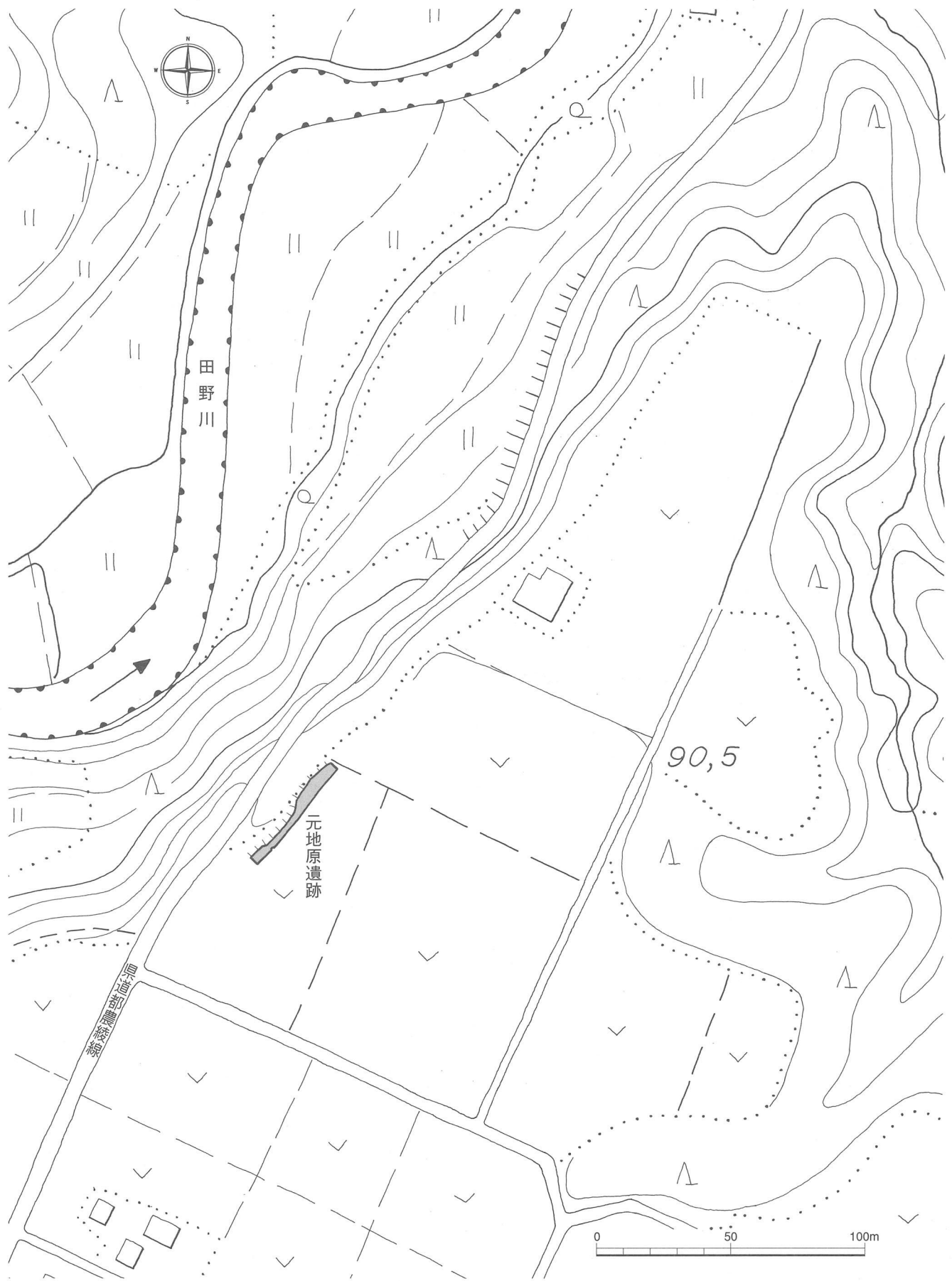
遺構実測と遺物の取り上げを行った後、トレンチにより小林軽石層の下層まで掘削し、遺構・遺物のないことを確認して調査を終了した。

### 第3節 基本層序

第Ⅰ層は耕作土である。アカホヤ火山灰をブロック状（径0.5～3cm大）に含む黒色土。軟らかく、さくさくしている。第Ⅱ層は黒褐色土層で、最下部に一次堆積のアカホヤ火山灰層に由来する径2mm大の火山豆石を含む。アカホヤ火山灰は周囲の黒色土と混合しており、攪乱を受けたものと思われる。アカホヤ火山灰は下位の黒色土中にも混入している。最下部だけ一次堆積の状態を残している。第Ⅲ層は黒色土層である。細粒でしまって硬い。下部に角礫を散点的に含む。第Ⅳ層は黒褐色土層である。0.1mm大の白色鉱物（斜長石）を全体に含む。径1mm以下の炭化物粒を少量含む。しまって硬い。角礫を散点的に含む。第Ⅴ層は黒褐色土層である。小林軽石（径1～3mm大）を混入する。しまって硬い。第Ⅵ層は明黄褐色軽石層（小林軽石層。14,000～16,000年前）である。径0.5～1cm大の軽石を多量に含む。他に白色鉱物（斜長石）、青色岩片を含み、砂状を呈する。硬くしまって層を成す。第Ⅶ層は暗褐色土層である。細粒でやや軟らかい。第Ⅷ層は暗褐色土層で、礫をやや多く含み、やや粘質である。第Ⅸ層は黄褐色土層でやや粘質で軟らかい。第Ⅹ層は黄褐色層で、礫を多量に含む砂である。第Ⅺ層は段丘礫層である。

遺構の検出は、Ⅲ層の黒褐色土層から行った。Ⅲ層下部からⅣ層上部にかけて集石遺構が、Ⅳ層上部では礫群が、Ⅵ層の小林軽石層上面では土坑やピット群等が検出された。

遺物は、縄文早期の土器片や石器・剥片等がⅣ層からⅤ層にかけて出土した。



第2図 元地原遺跡周辺地形図 (1/2000)

### 第3図 基本土層柱状図

I 耕作土	第I層 耕作土 (30~50cm; アカホヤをブロック状に含む黒色土)
II 黒褐色土層	第II層 黒褐色土層 (5~20cm; アカホヤ火山灰と黒色土が混合する)
III 黒色土層	第III層 黒色土層 (10~20cm; 硬くしまっている。下部に角礫を含む。)
IV 黒褐色土層	第IV層 黒褐色土層 (20~30cm; 硬くしまっている。遺物包含層)
V 黒褐色土層	第V層 黒褐色土層 (5~10cm; 小林軽石を混入する。遺物包含層)
VI 明黄褐色軽石層	第VI層 明黄褐色軽石層 (20cm; 軽石を多量に含み、硬くしまっている。小林軽石層)
VII 暗褐色土層	第VII層 暗褐色土層 (10cm~15cm; やや軟らかい)
VIII 暗褐色土層	第VIII層 暗褐色土層 (25~30cm; 礫をやや多く含む。やや粘質)
IX 黄褐色土層	第IX層 黄褐色土層 (20cm; やや粘質で軟らかい)
X 黄褐色土層	第X層 黄褐色土層 (10cm; 礫を多量に含む砂)
XI 段丘礫層	第XI層 段丘礫層

## 第Ⅲ章 調査の記録

### 第1節 縄文時代の遺構（第4図）

南側土層断面の観察によりⅢ層下部あたりから下層に向かって礫群が含まれていることが確認されていたので、集石遺構が検出される可能性が推測されていた。

Ⅲ層を掘り下げていくと下部から礫群が頭を表し始め、Ⅳ層上部で集石遺構と考えられる遺構が検出された。集石遺構周辺部には礫群の広がりが確認された。

土坑やピット群等の遺構は、埋土がⅣ層・Ⅴ層の黒褐色土と類似していたため、Ⅵ層（小林軽石層）上面まで掘り下げることによってようやく検出することができた。

#### ・集石遺構及び礫群

Ⅲ層下部からⅣ層上部にかけて集石遺構と考えられる遺構が検出された。集石遺構の周辺には礫群が広がり、調査区の南西部の広い範囲で検出された。礫群の中には縄文早期の土器片が散見されたが、その多くは集石遺構の周辺部に集中していた。

#### 1号集石遺構（S I 1）（第6図）

中央部からやや南西寄りで検出された集石遺構である。

礫は径1.50～1.60mの範囲に広がっている。礫の大きさは、最大のもので長径13cmぐらいしかなく、大半は中礫で、角礫が多い。また赤変した礫が半分以上を占めている。集石の石材の多くは砂岩が用いられている。礫間からは径1～2mmの炭化物がまばらに検出された。明確な掘り込みは認められず、敷石も見られなかった。出土遺物は土器片が礫に混じって7点、周辺部から3点出土した。集石遺構の中央部上面からは敲石が出土した。

礫群の範囲が広がるにつれて、礫群の一部として埋没してしまいそうになったが、礫の重なりが礫群の中では最も集中しており、集石遺構と考えられる。


#### 礫群（第7図）

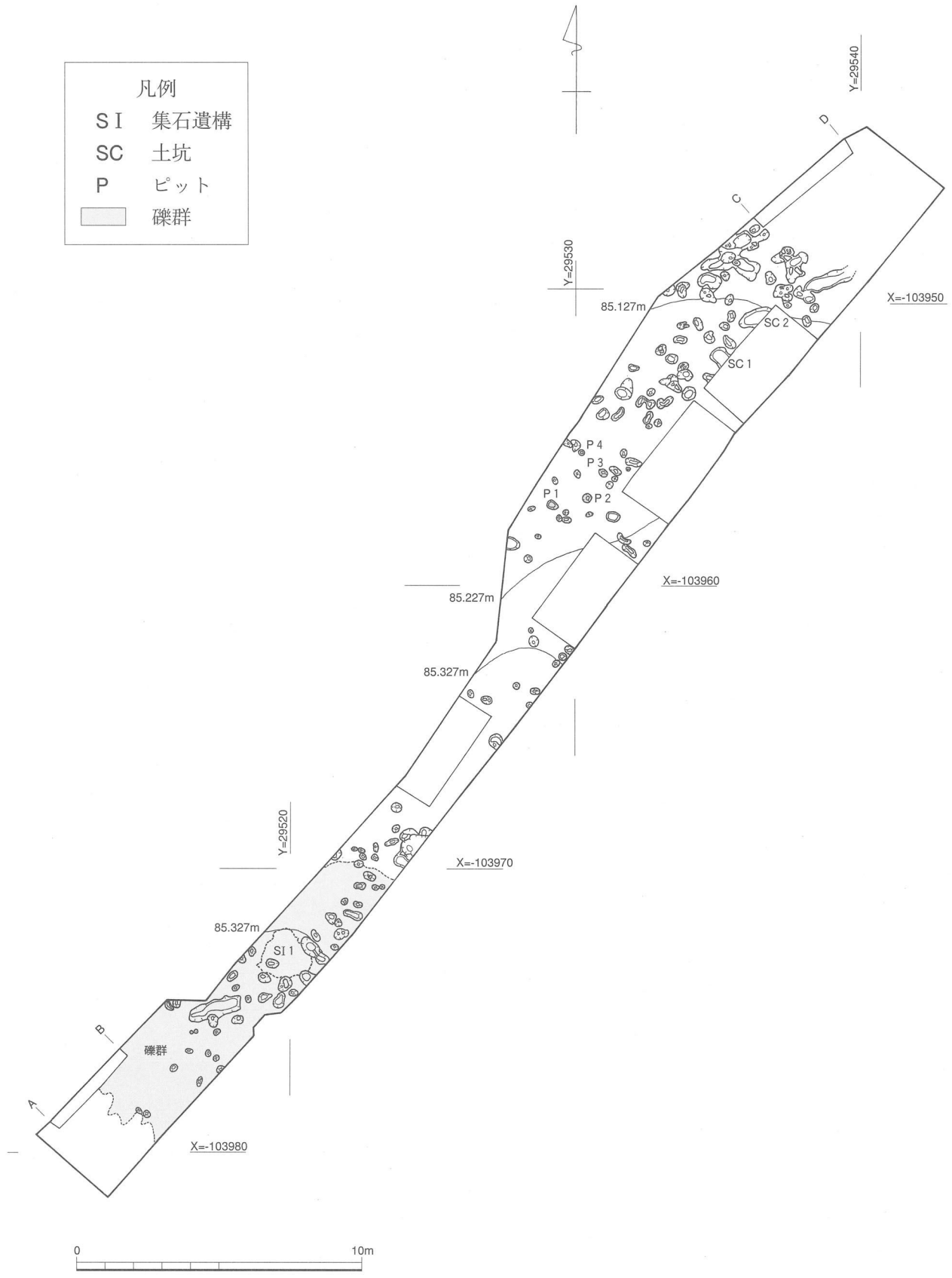
集石遺構の周辺には礫群が広範囲にわたって検出された。調査区の幅が狭いため、全体の範囲は不明確だが、南北約12mに及ぶ。中礫から大礫が多く、あまり大きい礫は見られない。亜角礫や角礫が多く、赤変している礫も含まれることから廃棄礫であると考えられる。

#### ・土坑（第8図）

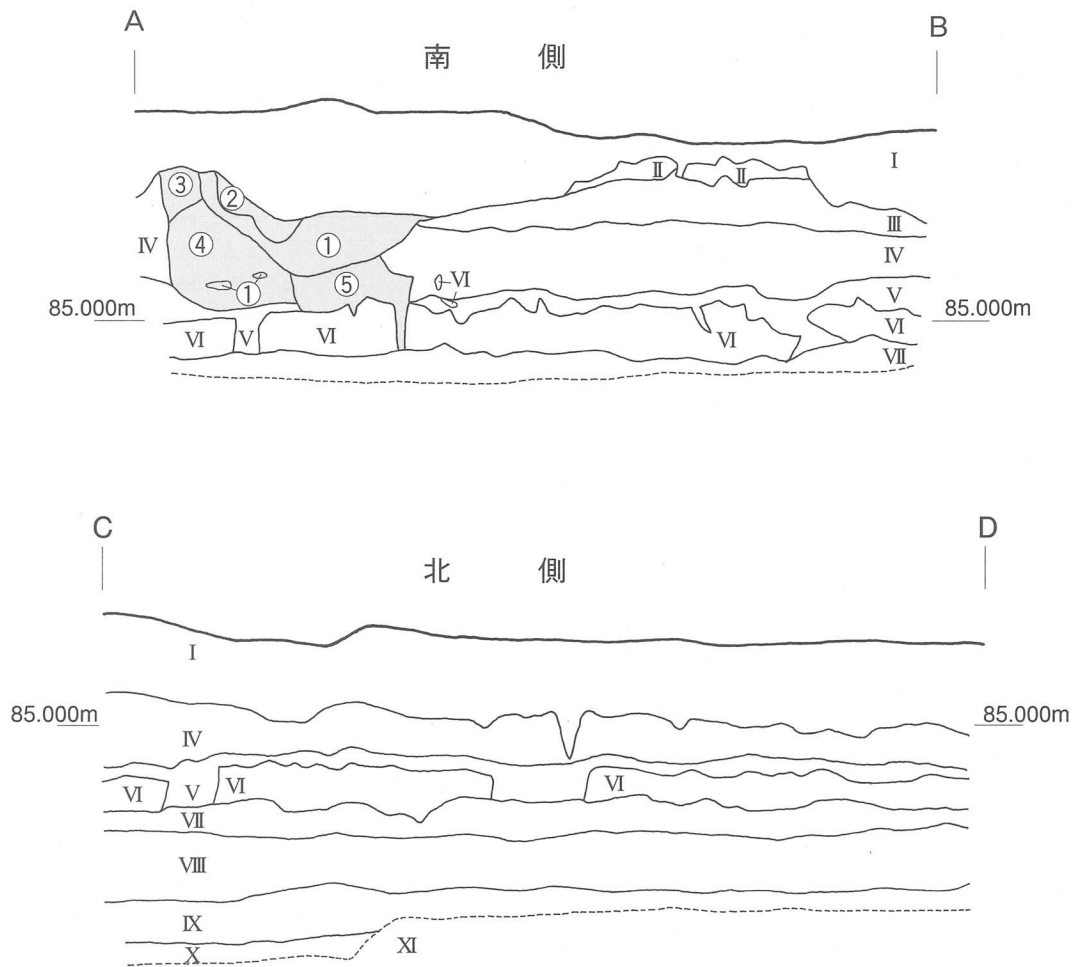
#### 1号土坑（S C 1）

調査区の北東側で検出された土坑である。トレンチの掘削で南東側半分を壊されているため、全体形を特定できないが、残されている部分の長軸は約60cm、短軸は約54cm、深さ約40cmである。両側の壁面に焼土が検出されており、炉穴の可能性も考えられる。埋土はⅣ層の黒褐色土層と同じである。

凡例	
SI	集石遺構
SC	土坑
P	ピット
	礫群



第4図 元地原遺跡遺構分布図 (1/200)



- I 耕作土 アカホヤをブロック状に含む黒色土。
- II 黒褐色土層 アカホヤ火山灰と黒色土が混合する。
- III 黒色土層 硬質。下部に角礫を散点的に含む。
- IV 黒褐色土層 硬質。縄文早期の遺物包含層
- V 黒褐色土層 小林軽石を混入する。縄文早期の遺物包含層。
- VI 明黄褐色軽石層 硬質。軽石を多量に含む。
- VII 暗褐色土層 やや軟質
- VIII 暗褐色土層 やや粘質。礫をやや多く含む。
- IX 黄褐色土層 軟質。やや粘質。
- X 黄褐色土層 砂質。礫を多量に含む。
- XI 段丘礫層

■ は風倒木

- ① 黒褐色土 アカホヤ火山灰と黒色土が混合する。
- ② 橙色土 全体が橙色を帯びたアカホヤ火山灰層。
- ③ 黒色土 硬質。
- ④ 黒褐色土 底部にアカホヤブロックを混入する。
- ⑤ 黒褐色土 軟質。径2~3cmのにぶい黄褐色土を円~楕円状の斑に含む。

第5図 元地原遺跡土層断面図 (1/40)

## 2号土坑（SC2）

調査区の北東側、SC1の北側で検出された土坑である。SC1と同様、トレンチの掘削で南東側半分を壊されているため、全体形を特定できないが、残されている部分の長軸は約90cm、短軸は約64cm、深さ約20cmである。主軸は西方向を指している。埋土はIV層の黒褐色土層と同じである。

### ・ピット群（第9図）

調査区全域にわたって、VI層の小林軽石層上面から、直径15～70cm、深さ20～30cmのピットが多数検出された。北東部（第9図）と南西部では特に集中が見られた。埋土は0.1mm大の白色鉱物（斜長石）を全体に含む黒褐色土で、IV層と同じである。

調査対象面積が狭いため、全容を明らかにすることはできなかったが、ピット群の中で、P1～P4は半円形にめぐりそうな様相を呈しており、平地式住居の可能性も考えられる。

## 第2節 縄文時代の遺物

### ・土器（第11図）

縄文時代早期の土器は、IV層及びV層で、26点出土した。多くは無文土器で、表面が風化したり、裏面が剥離したりしていた。土器片の出土状況は、南西部への集中が見られた（第10図）。

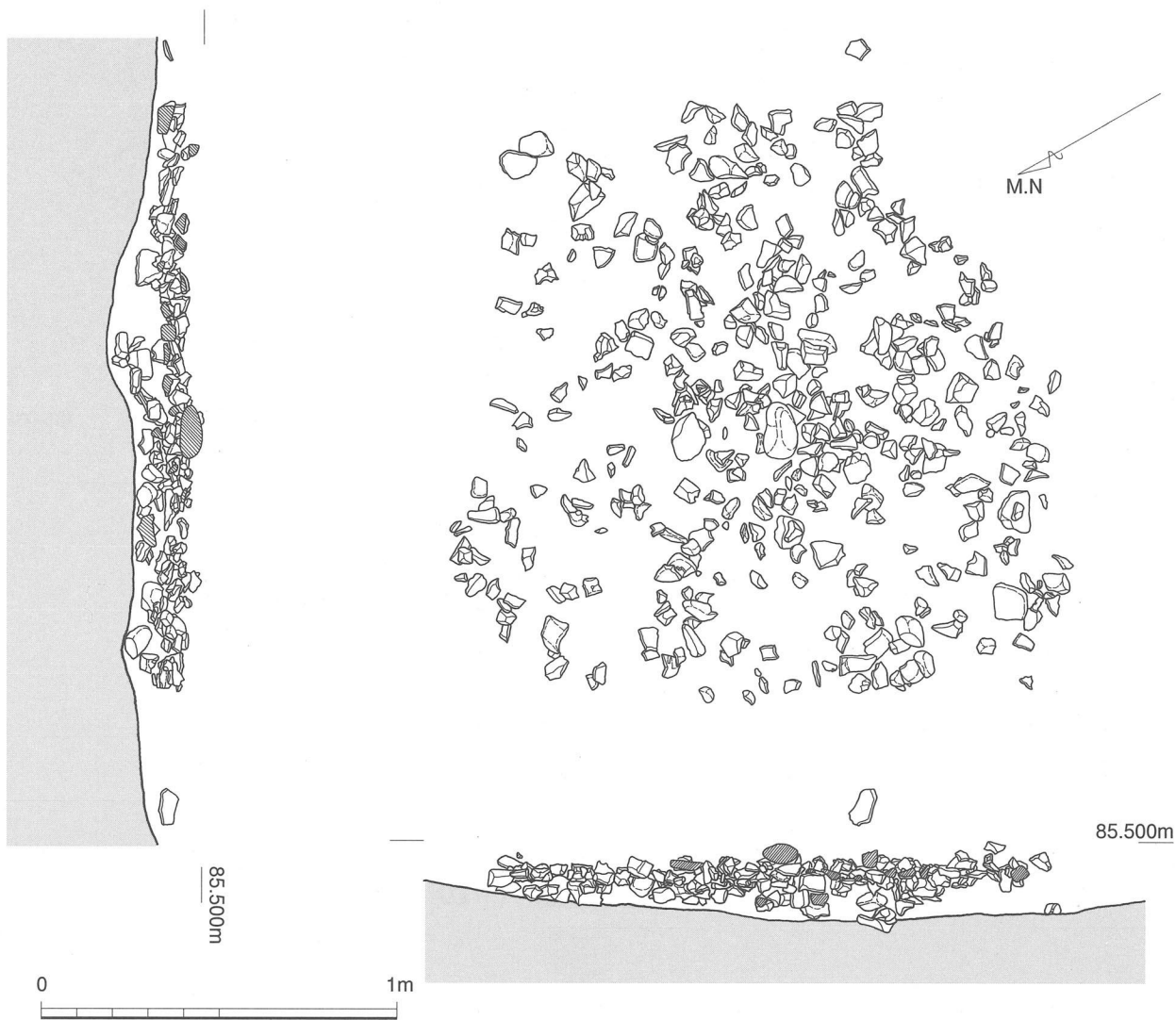
1～7は深鉢と思われる。1は口縁で、外面は貝殻条痕調整で、内面はナデである。2は口縁で、外面は貝殻条痕調整で、穿孔がある。内面は丁寧なナデ調整である。3・4は、胴部で外面は貝殻条痕調整であるが、内面は剥離のため調整不明である。5は胴部で、外面はナデの後、貝殻条痕調整である。内面は剥離のため調整不明である。6は底部付近で、外面は、山形押型文が見られ、一部山形押型文の後、ナデ調整している。内面はナデ調整である。7は胴部で、内面は丁寧なナデ調整であるが、外面は風化のため調整不明である。

### ・石器（第12～13図）

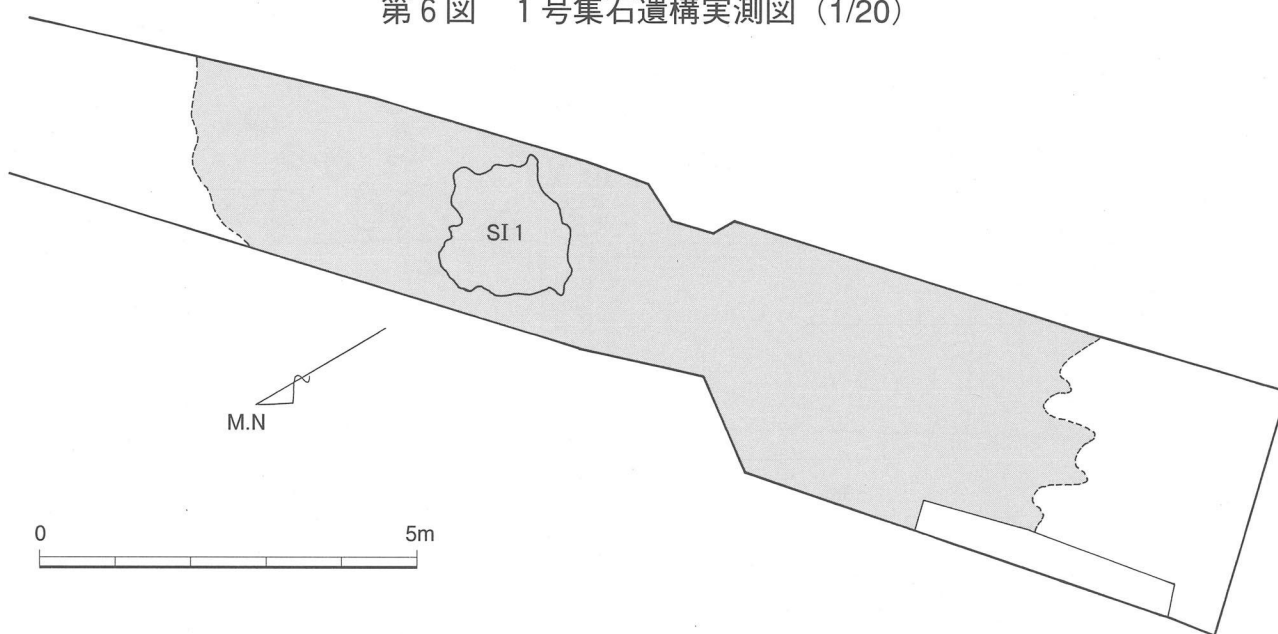
出土した遺物の多くは小さな剥片であったが、石鏃2点、敲石1点、楔形石器1点、石核の残核1点、二次加工痕のある剥片1点等が出土した。石器の出土状況は、北東部への集中が見られた（第10図）。

8・9は石鏃である。2点とも黒曜石製で、二等辺三角形タイプの無茎凹基鏃である。10は楔形石器である。チャート製で、両側面から剥離を行い、下・両側縁にエッジを作り出す。縦断面は楔形を、横断面はレンズ型をなす。11は石核の残核である。チャート製で、不整形の剥片を表裏両面のほぼ全周にわたって剥離を行っている。12は二次加工のある剥片である。黒曜石製で、不定形剥片の両側縁両面に加工痕が見られる。13～23は剥片である。13・15・18～21・23は頁岩、16は黒曜石、17・22はホルンフェルスである。24は1号集石遺構上面中央部出土の敲石で、砂岩である。下方先端部に敲打痕が認められる。

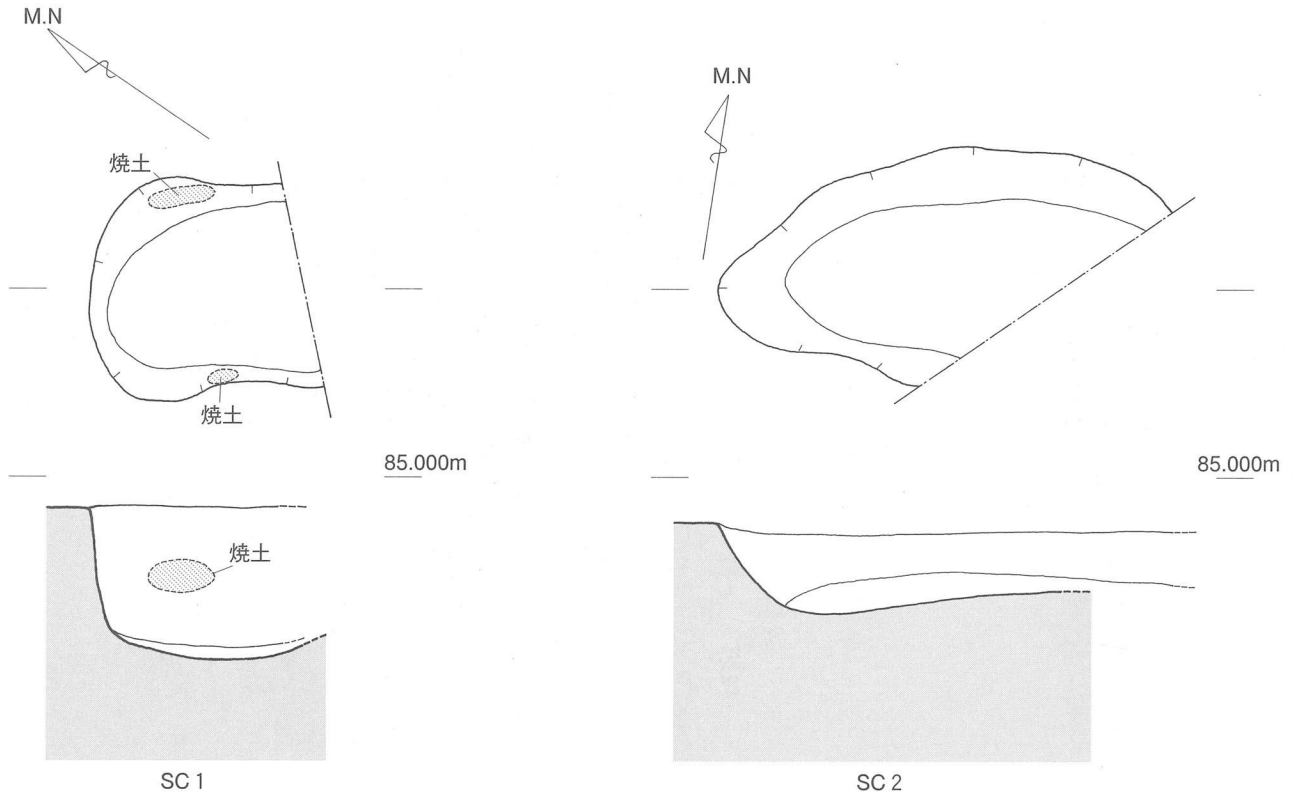




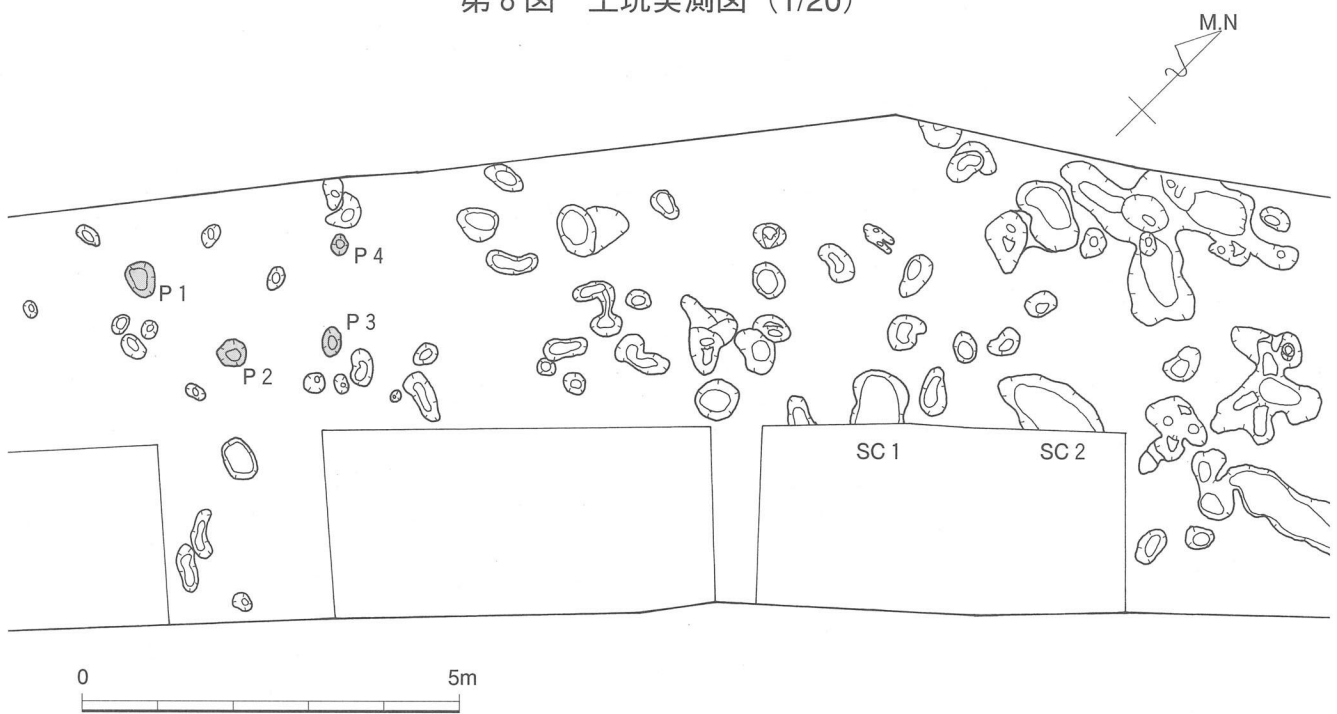
第6図 1号集石遺構実測図 (1/20)



第7図 礫群範囲図 (1/100)



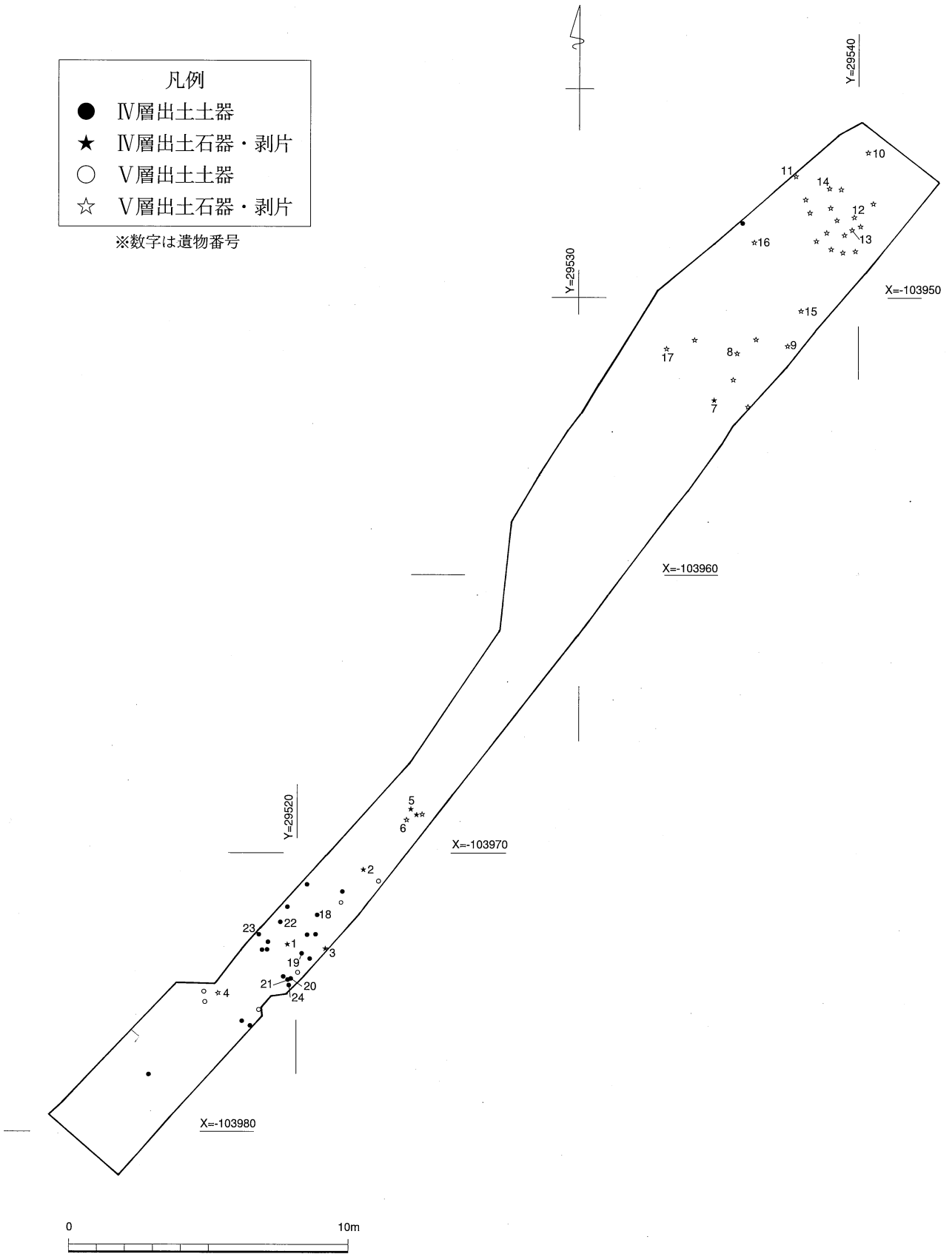
第 8 図 土坑実測図 (1/20)



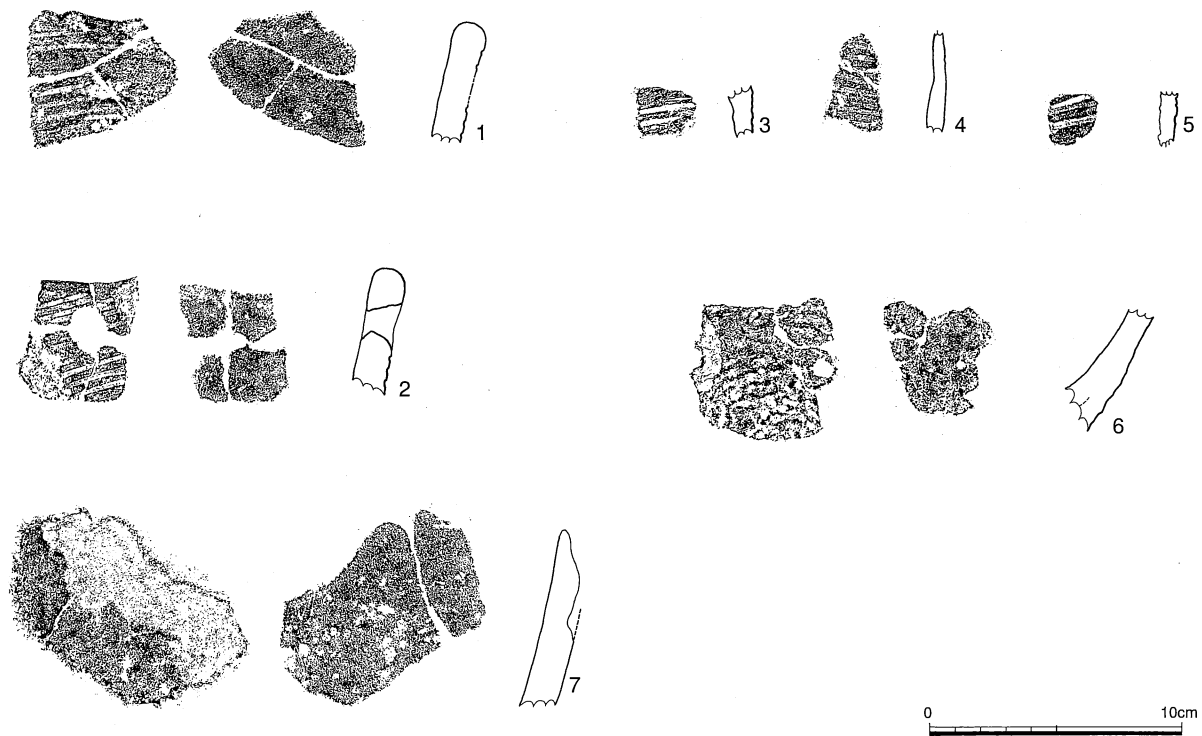
第 9 図 北東側ピット群実測図 (1/80)

- 凡例
- IV層出土土器
  - ★ IV層出土石器・剥片
  - V層出土土器
  - ☆ V層出土石器・剥片

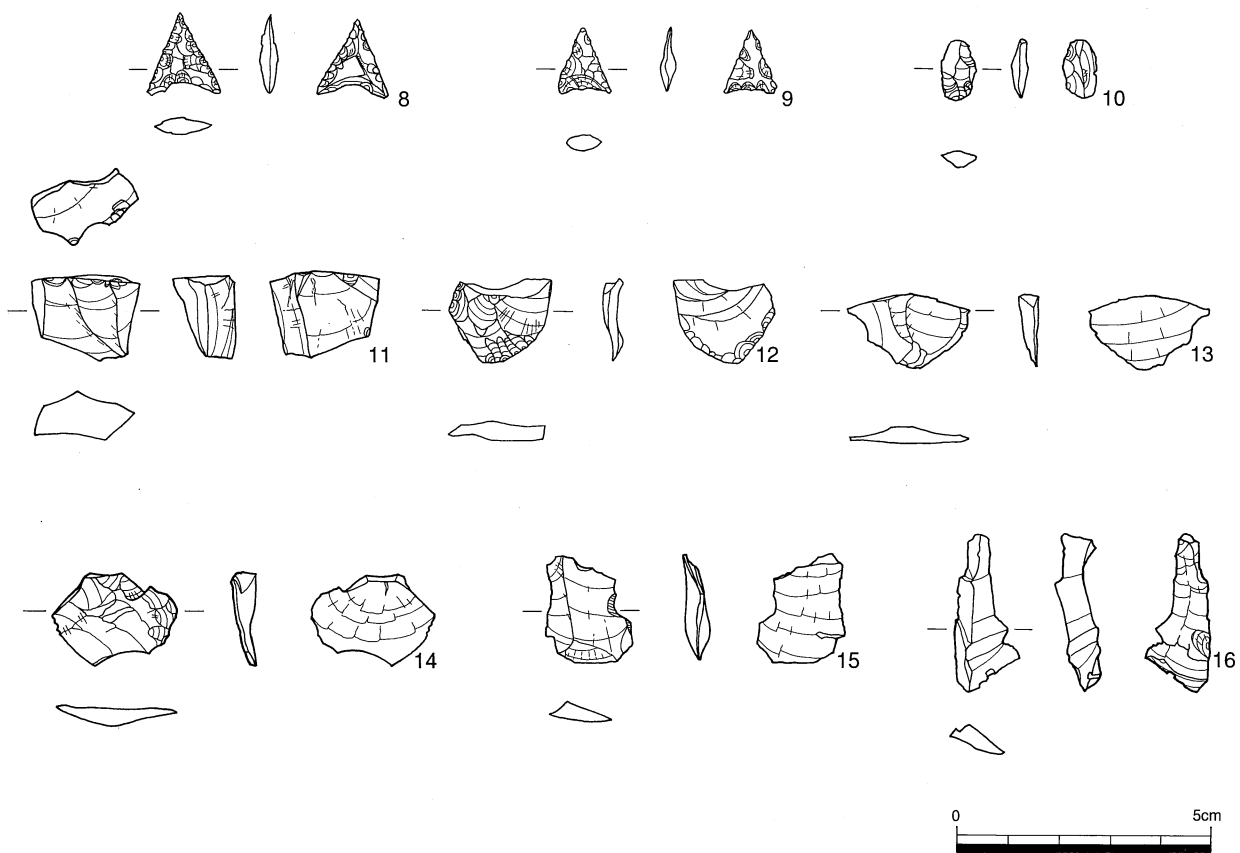
※数字は遺物番号



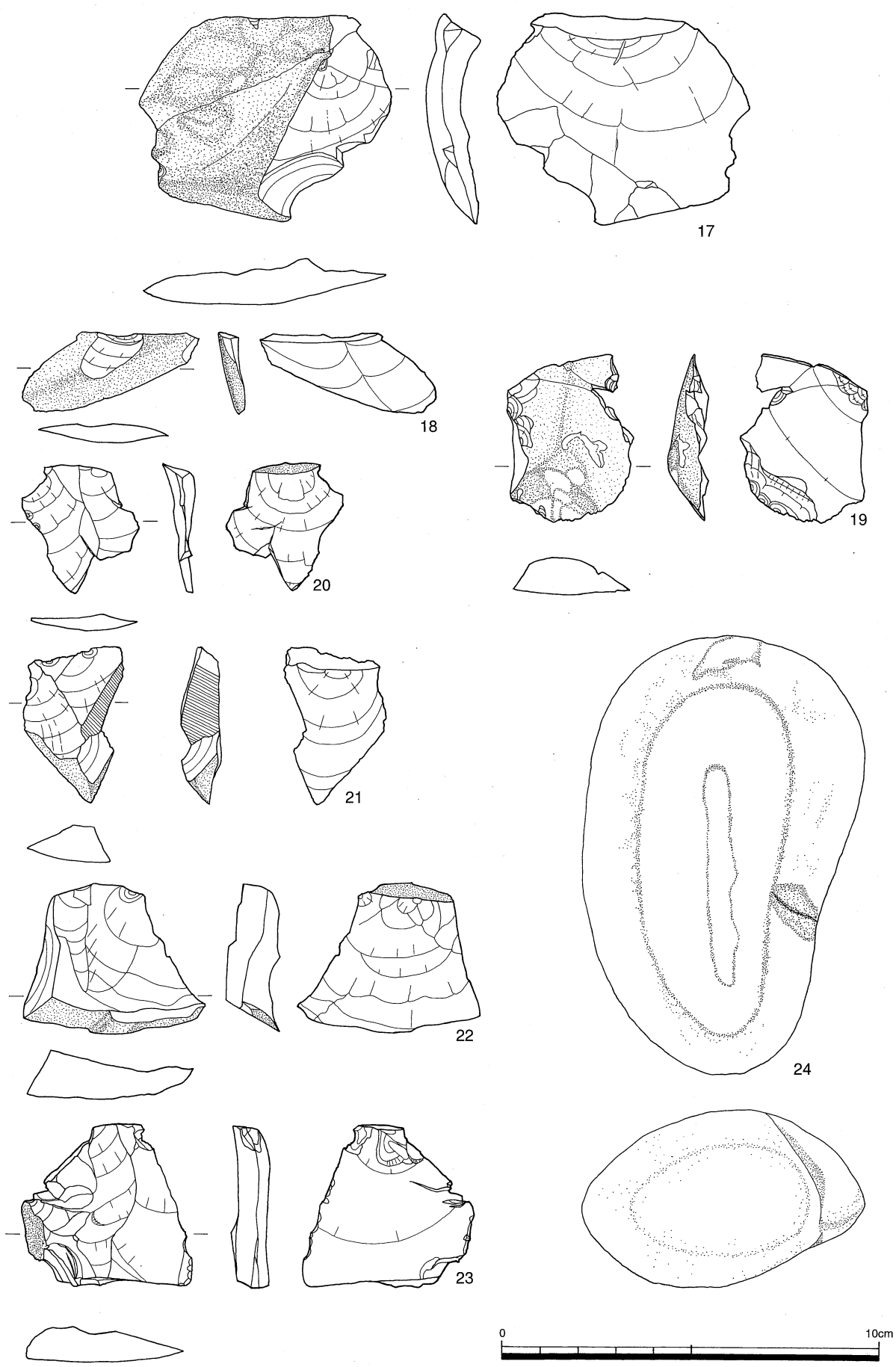
第10図 IV層・V層出土遺物分布図 (1/200)



第11图 元地原遺跡出土土器実測図 (1/3)



第12图 元地原遺跡出土石器実測図 (1) (2/3)



第13图 元地原遺跡出土石器実測図 (2) (2/3)

第1表 元地原遺跡出土土器観察表

遺物番号	種別	器種部位	出土地点	手法・調整・文様ほか		色調		胎土の特徴	備考
				外面	内面	外面	内面		
1	縄文土器	深鉢口縁	IV層	貝殻条痕, スス付着	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	0.5mm~2.5mmの鈍い黄橙色の粒を多く含む。黒色で光る鉱物粒を含む。	
2	縄文土器	深鉢口縁	IV層	丁寧なナデ, 斜め方向に貝殻条痕文, スス付着	丁寧なナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	2mm以下の白色, 1mm以下の灰色, 微細な無色透明の鉱物粒を多く含む。	穿孔
3	縄文土器	深鉢胴部	IV層	貝殻条痕	剥離のため調整不明	にぶい褐		1mm以下のにぶい黄橙色の粒を含む。	
4	縄文土器	深鉢胴部	V層	貝殻条痕	剥離のため調整不明	灰黄褐		1mm以下のにぶい黄橙色の粒を含む。	
5	縄文土器	深鉢胴部	IV層	ナデの後, 貝殻条痕文	剥離のため調整不明	にぶい黄褐	褐灰	微細な無色透明・白色の鉱物粒を多く含む。	
6	縄文土器	深鉢底部付近	IV層	山形押型の後, ナデ山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	3mm以下の白色(軽石っぽい), 1mm以下の灰・褐色, 1mm以下の黒く光る鉱物粒を少し含む。	
7	縄文土器	深鉢胴部	IV層	風化のため調整不明	丁寧なナデ	浅黄橙	にぶい黄橙	2mm以下の褐色, 3mm以下の灰白, 微細で無色透明の鉱物粒を多く含む。	

第2表 元地原遺跡出土石器計測表

遺物番号	出土地点	品種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石材	備考
8	IV層	石鏃	1.65	1.45	0.35	0.4	頁岩	
9	V層	石鏃	1.35	1.05	0.3	0.3	黒曜石	
10	V層	楔形石器	1.2	0.7	0.35	0.2	チャート	
11	V層	石核の残核	1.7	2.15	1	3.8	チャート	
12	V層	二次加工のある剥片	1.7	2	0.4	1.3	黒曜石	
13	V層	剥片	1.5	2.4	0.35	1	頁岩	
14	V層	剥片	1.85	2.5	0.45	1.6	チャート	
15	V層	剥片	2.15	1.75	0.45	1.2	頁岩	
16	IV層	剥片	3.15	1.3	0.6	1.2	黒曜石	
17	V層	剥片	5.6	6.7	1.2	39.1	ホルンフェルス	
18	V層	剥片	2.1	4.7	0.5	4.2	頁岩	
19	V層	剥片	4.5	3.35	1.05	15.8	頁岩	
20	V層	剥片	3.45	3.1	0.48	4.4	頁岩	
21	IV層	剥片	4.2	2.65	0.95	9.7	頁岩	
22	V層	剥片	4.05	4.8	1.35	23.6	ホルンフェルス	
23	V層	剥片	5.35	4.5	0.9	18.9	頁岩	
24	IV層	敲石	15.7	10	6.3	1,230	砂岩	

### 第3節 まとめ

元地原遺跡は、縄文時代早期の遺跡である。調査区が狭小である上、遺物の出土も少なく、遺跡の全容を把握するには至らなかったが、小林軽石層が良好な状態で堆積し、土坑やピット群などが多数検出されたことで、台地上に展開する遺跡の可能性を示唆できたことは大きな成果であった。

ここでは調査の成果について簡単にまとめたい。

#### 縄文時代の遺構

今回検出した遺構は、集石遺構・土坑・ピット群等であるが、すべて縄文時代早期の遺構と考えられる。土坑の中には、焼土が検出され、炉穴の可能性の指摘されるものが検出された。ピット群の一部には半円形に近い形で並ぶピットがあり、平地式住居跡の可能性も考えられたが、調査区の西端部のため、全容を検出することができなかった。縄文時代早期の平地式住居跡は小林市の内屋敷遺跡で、馬蹄形9軒、方形1軒、半円形1軒の計11軒が検出されている。串間市の留ヶ宇戸遺跡では、平地式住居ではないものの縄文時代早期前半から後半にかけての竪穴住居跡、集石遺構、炉穴、土坑が検出されており、住居に伴う遺構のあり方に類似性が見られる。

#### 縄文時代の遺物

今回の調査では、台地の縁辺に形成された包含層より、縄文時代早期と考えられる土器片、石器、剥片等が出土した。

土器片の多くは磨滅が著しく小破片であったものの、貝殻条痕文5点と山形押型文1点が出土した。石器類も小剥片が多かったものの、石材は黒曜石・チャート・ホルンフェルス・頁岩・砂岩等が見られ、石鏃2点、楔形石器・石核の残核・二次加工のある剥片各1点が出土した。

これらの遺物の出土は、周辺の遺構のあり方を推定する材料としての資料を提出したと言える。

#### 〈参考文献〉

- 国富町教育委員会 1983『国富町文化財調査資料第3集 遺跡詳細分布調査報告書』  
野口逸三郎 1997『宮崎県の地名』平凡社  
西都史編纂委員会 1976『西都の歴史』  
西都市教育委員会 1987『西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 囲横穴墓 元地原地下式墳墓群』  
西都市教育委員会 1997『西都市・埋蔵文化財発掘調査報告書第26集 雷野遺跡』  
八木澤一郎 1993「鹿児島県下の縄文期集石集成Ⅱ」『南九州縄文通信』No.7  
八木澤一郎 1994「南九州の集石遺構」『南九州縄文通信』No.8  
宮崎県教育委員会 1999『内屋敷遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第14集  
宮崎県教育委員会 1998 資料集『シンポジウム旧石器時代から縄文時代の生活を考える』



1. 調査区全景（南から）



2. 調査区全景（北から）



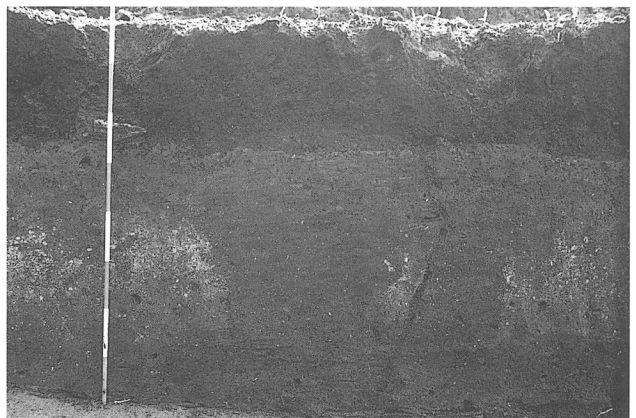
3. 南側土層断面



4. 北側土層断面



5. 南側土層断面（風倒木）



6. 土層断面（ピット）

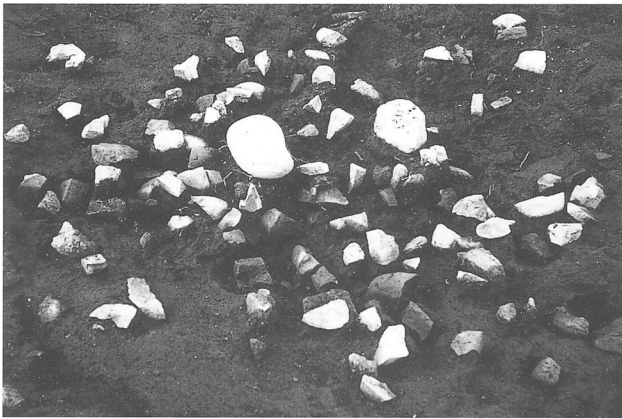




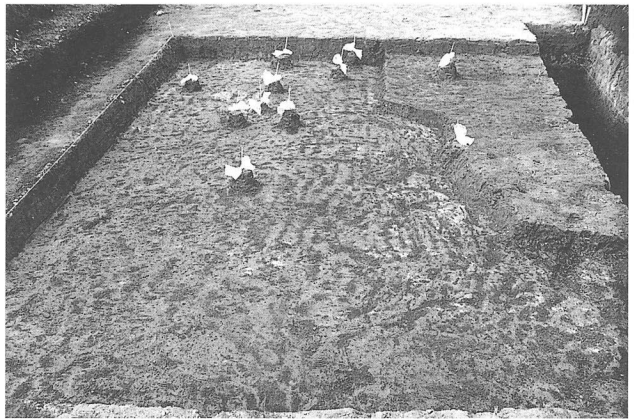
1. 礫群 (南から)



2. 礫群 (東から)



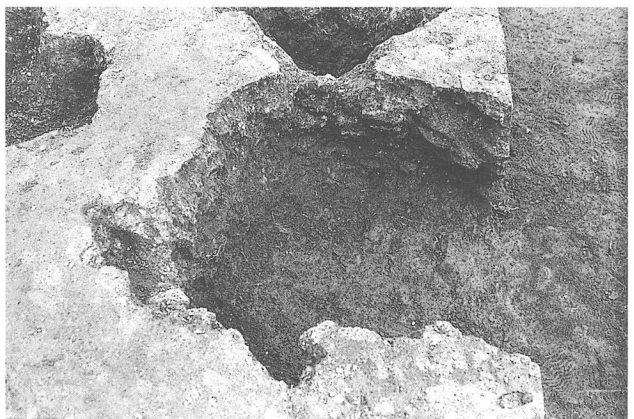
3. 1号集石遺構 (東から)



4. 北東側石器出土状況 (北から)



5. 北東側ピット群 (北から)



6. 1号土坑 (南から)



7. 1号土坑 (東から)



1. 1号土坑 (北から)



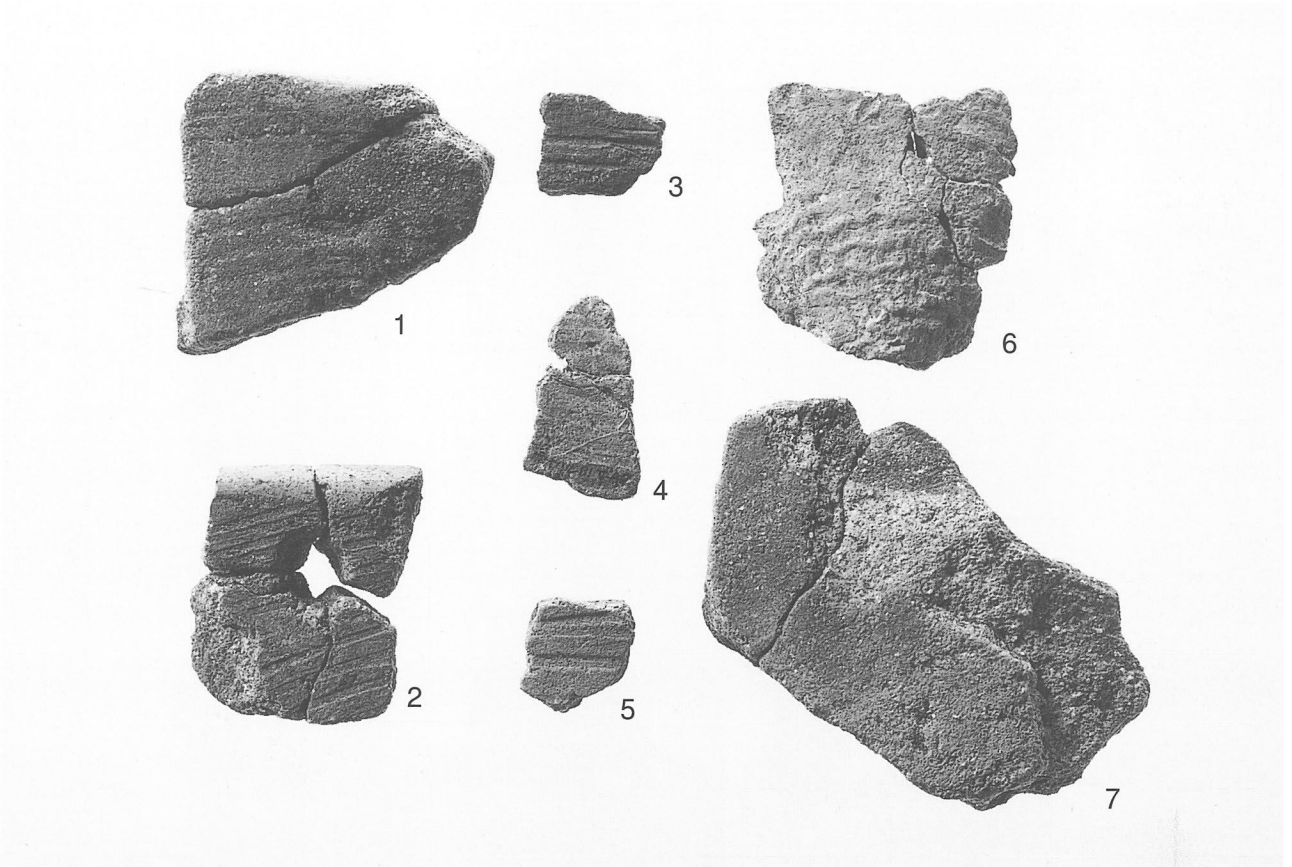
2. 2号土坑 (東から)



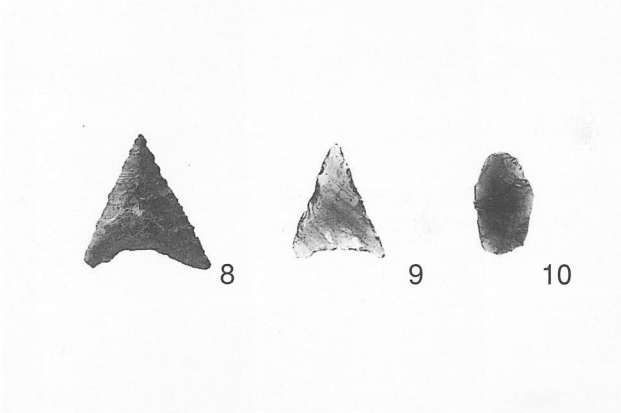
3. ピット群 (P1~P4・東から)



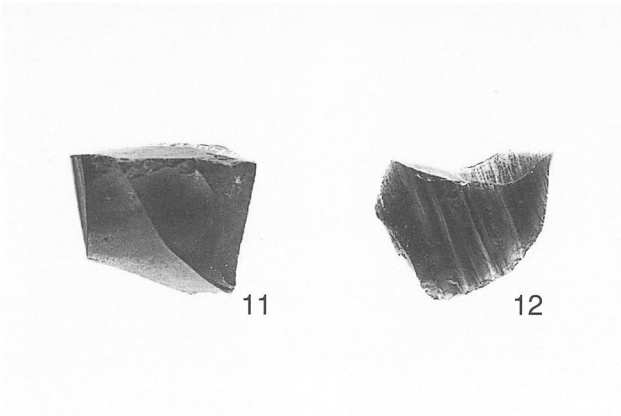
4. ピット群 (P1~P4・南から)



5. 縄文時代早期土器



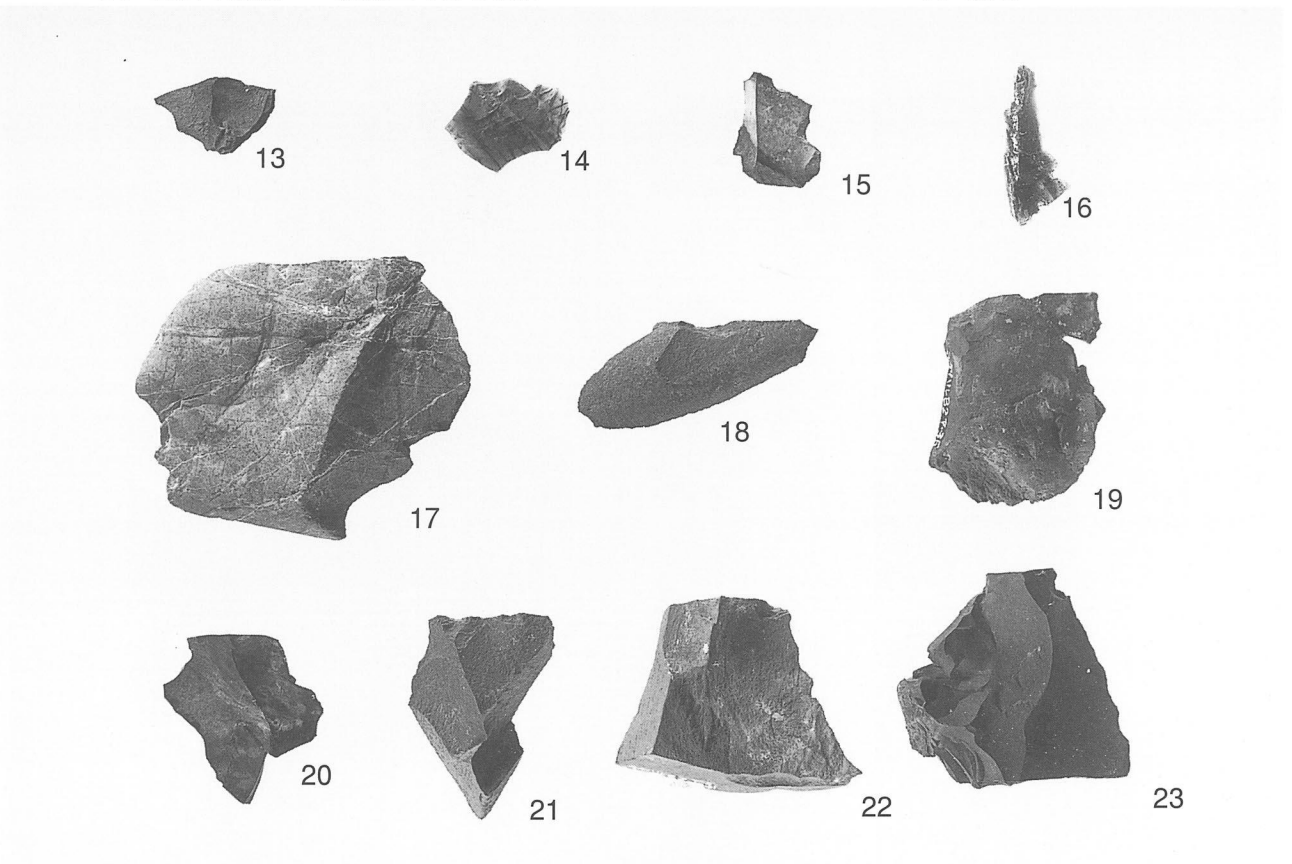
1. 石鏃・楔形石器



2. 石核の残核・二次加工のある剥片



3. 敲石



4. 剥片

# 報告書抄録

フリガナ	モトチバルイセキ							
書名	元地原遺跡							
副書名	地方特定道路整備事業（都農綾線・元知原工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第37集							
編集者名	鈴木健二							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地							
発行年月日	2001年3月9日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
モトチバルイセキ 元地原遺跡	サイトシオオアザカミ 西都市大字上  サンザイアザモトチバル 三財字元地原	45208		32度 03分 42秒	131度 18分 46秒	1998.9.16 ) 1998.10.23	280㎡	道路整備
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
元地原遺跡	集落	縄文時代		集石遺構 1 土坑 2		縄文土器 石鏃 楔形石器		

---

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第37集

## 元地原遺跡

地方特定道路整備事業（都農綾線・元知原工区）に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成13年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地  
TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660

印刷 (株) 長崎印刷

〒889-4413 西諸県郡高原町大字後川内18-2  
TEL 0984-42-1069 FAX 0984-42-1330

---